



滝ヶ谷公園ニュース第18号



紅葉の季節

今年は夏にほどよい降水があり、秋の気温も高目であったことから、例年よりやや遅い11月下旬になって滝ヶ谷公園の紅葉も見頃となりました。

紅葉を楽しみながら散歩している人と犬を撮らせて頂きました。



落葉拾いの季節



美しくし隊にとっては、紅葉の季節は落葉拾いの季節の始まりであります。

竹ぼうき、箕、大型袋の「落葉拾い三種の神器(写真左)」を抱えて公園内を駆けずり回り、拾った落葉は廃木を組上げて作った落葉ため(写真上)に集めます。

落葉は1~2年を経て良質の堆肥となり、サクラの肥料などに再利用しています。

新連載「滝が谷公園の自然」 ①太山寺原生林

1. 「鎮守の森」と太山寺原生林

後述のとおり、土地本来の植生(植物の集まり)である、自然潜在植生を推定しうる有力な「手がかり」が「鎮守の森」である。

日本ではアミニズムと合体し、「木に神が宿る」、「木を切るとタタリがある」などの言い伝えが、土地本来の植生を保存、維持する結果につながり、神社や寺がその「拠点」となった。この「鎮守の森」では、基本的に伐採が禁止されてきたため、土地本来の種の存続、維持が可能となった。

新興住宅地である「神の谷」では、「鎮守」そのものが存在しないが、当地では、近傍の「太山寺原生林」(太山寺の南東斜面林:右図参照)が、立地、直線距離、土壌、気象条件等から潜在自然植生と考えると間違いあるまい。自然植生にあつては、人間による維持管理は不要である。

この原生林は、コジイ、ウバメガシなどの常緑広葉樹で覆われている。滝が谷公園もまったく手を加えず放置する(この場合、文字通り手を入れないことを意味する)ならば、何年かの後には太山寺原生林と同じ林相が出現するのである。原生林の形成に要する時間については、残念ながら分からない。この考え方の傍証としては、当公園に自生する「アキニレ」をあげることができるであろう。人によって植えられてはいないことが確実なこの木(ツツジの株間など到底人間が植えたとは考えられないところにある)、鳥の媒介により発芽したことは、ほぼ間違いない。このように自然発生ともいふべき、人の仲介によることのない、植物の発芽、生育が絶えず繰り返し行われており、例えば火災による裸地化が起きるならば、1年性の草が出た後、ススキのような多年性の草、陽地性のマツなどが出現し、経年変化により、陰地性の高木などが順次、現れ(専門的には「遷移」と呼ばれる現象)、最終的には自然植生に戻るのである。

2. 「白砂青松」と「松竹梅」

日本の代表的な風景といわれる「白砂青松」であるが、マツの生育環境は限定される。マツは陽木であつて、日照がなければ生育できない。しかも代表的な生育場所は、尾根筋や急斜面地などの貧栄養の土壌である。宮城県の松島のように、小島の狭小な頂に生えるマツが典型例である。マツは、富栄養化したところや直射日光を受けないところでは、枯死する。タケ(モウソウチク)は、250年ほど前に中国から輸入された外来種である。ウメも同じく中国からの外来種である。外来種であるという理由で、排除することもいかがとは思ふが、日本の固有種でないことは確かであり、維持管理に手間がかかることは、事実である。

(次号に続く)



滝が谷公園と太山寺原生林は直線距離で僅か1.5km!

12月-2月の活動予定

- 12月 : 4日、18日 ~ 落葉拾い等 (各15時-17時)
- 1月 : 8日、22日 ~ 落葉拾い等 (各15時-17時)
- 2月 : 5日、19日 ~ 樹木の追肥等 (各15時-17時)

どなたでもご参加下さい。お待ちしております。

滝が谷公園ニュース 第18号

発行日: 2005年 11月 23日 (季刊年4回発行)

発行人: 公園美緑花ボランティア 滝が谷公園を美しくし隊
代表連絡先: 川村 (神の谷3-5-20, kawatake@r5.dion.ne.jp)

「滝が谷公園」ホームページ開設中